

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	池田華子
論文題目	シモーヌ・ヴェイユに見る「関係」の創造性 —「創造的注意」に基づく臨床教育的関係論—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文「シモーヌ・ヴェイユに見る『関係』の創造性—『創造的注意』に基づく臨床教育的関係論」は、フランスの思想家シモーヌ・ヴェイユの「創造的注意」という概念を手がかりに、ヴェイユのテクストを読み解くことを通して、「教育関係」を自我的主体としての個人による二者関係として語るのではなく、「関係」そのものから語り直す方向を示し、臨床教育学の再構築の方途を明らかにしようとするものである。</p> <p>まず序章において、本論文の中心的な課題が教育関係論の問い直しによる臨床教育学の方法を明らかにするものであることが示される。その自我的主体の二者関係という前提を問い直すために、「関係」そのものから出発する必要があると述べられ、「関係」そのものから問い直した思想家としてシモーヌ・ヴェイユの名前が挙げられる。次いで、ヴェイユについての先行研究の問題点が提示され、そのなかで本研究がもつ研究上の意義が明らかにされる。</p> <p>第1章では、ヴェイユの「創造的注意」を、通常理解されるような自己保存のための警戒的な注意から区別し、主体が「関係」へと自己を放擲する認識の方法であることが明らかにされる。そのなかで、「注意」の向けられる先は、表象不可能でありながら「注意」を向けざるをえない「存在しないもの」(意志的努力によって把握しようものではないにもかかわらず、私たちにとって待望せずにはいられないもの)であること、そして、もともと「注意」とは「待ちのぞむ」を語源とする言葉であり、到来するものを願い求める不動の待機であることが明らかにされる。</p> <p>第2章では、「創造的注意」が「時間」の観点から捉え直される。まず直線で不可逆な連続という自我的主体を中心におく遠近法的な通俗的時間概念が退けられ、「～の間に」を意味する「メタクシュ」というギリシャ語の前置詞の考察を手がかりに、「存在しないもの」と関係をもつことが時間的な体験であることが明らかにされる。そして、この時間的な体験が遠近法的時間とは異なる非連続な「時間」の継起の集積としての「非指向的時間」であることが示される。さらに、「創造的注意」によって、この「非指向的時間」がもたらされることが明らかにされる。</p> <p>第3章では、同じ主題が「身体」の「体験」(痛み、飢えなど)の問題として捉え直されることになる。そこでは、自我的主体としての「私」に所有される「身体」とは異なり、自我的主体に由来する遠近法から解放され、あらゆる存在するものに享受されうる生の可能性としての絶対的な受動性ともいべき「植物的身体」の可能性が提示される。そして、このような「植物的身体」としての主体のありようは、「創造的注意」によって可能になるとされる。</p> <p>そして第4章では、「創造的注意」における創造性とは何か、神の「創造」を反省した「脱創造」というヴェイユ特有の概念を手がかりに明らかにされる。ヴェイユ</p>			

(続紙 2)

は「創造」は神による「権能」の表れとは取らず、神における「否定」の「体験」と捉え、そのような神の「創造」に「応答」する人間の行為を「脱創造」と呼んでいる。このヴェイユの論に従い、これまでに論じられてきた自我的主体の否定としての「非指向的時間」と「植物的身体」は、神の神による「否定」に倣う「応答」＝「脱創造」として捉え直される。「応答」としての「創造的注意」によって「存在しないもの」の不在性という「関係」が開かれるとされ、このような「関係」を開くことを「倫理」の創造性と捉えることが明らかにされる。

終章では、これまでの議論を踏まえて、「創造的注意」についてのヴェイユの考察が、「存在しないもの」の不在性をめぐってなされたものであり、この「存在しないもの」の不在性という「関係」に立つとき、実体的な人間存在に基づく二者関係に拘束された関係論ではない、非人格的で非指向的な「関係」論の可能性が開かれることが明らかにされる。そして、本論文を「関係」の「体験」を通じて「関係」を主語に「関係」の目から「関係」を見る眼差しの形成を追求する試みとして捉え直し、ここから方法としての臨床教育的関係の語り方が示される。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

教育的関係論というのは、ドイツのディルタイ学派の教育思想家たちの研究から始まり、教育人間学の研究者たちに受け継がれて発展してきた教育思想研究の中心主題の一つで、教師と学習者との関係を教育的観点から究明するものであった。著者はこの関係論が二項を前提とする実体的な問題構成となっていることを批判し、実体的な構成要素の側から関係を捉えるのではなく、構成要素に先立って存在する「関係」それ自体の働きを明らかにすることで、臨床教育学の方法として捉え直そうとする。言い換えれば、本研究は「関係」の「体験」を通じて、「関係」を主語にして、「関係」の目から「関係」を見る眼差しの形成を追求する試みである。

このとき手がかりとなるのが、「関係」の「体験」を考察したフランスの思想家シモーヌ・ヴェイユのテキストである。本研究の優れているところは、このような主題の探究において、このヴェイユのテキストを選択し、ヴェイユの「創造的注意」をキーワードにしてアプローチした点である。しかし、より正確に言い換えるなら、このヴェイユのテキストの読解は、ヴェイユのテキストによって「関係」の「体験」を描き出すという当初の目的を超えて、ヴェイユの「創造的注意」の概念の解釈によってヴェイユ思想の中核を明確に描き出すものとなっており、その意味では、本研究はヴェイユ研究として極めて高度な読解を達成したものだといえるべきであろう。

ヴェイユの「創造的注意」というのは、「注意」という言葉がもつ自己保存を目的とする警戒的な認識の構えを意味しているのではない。「創造的注意」とは自我的主体が「関係」へと自己を明け渡す認識の方法である。「創造的注意」の探究を通して、自我的主体が遠近法から解放され、「関係」へと自己を明け渡す絶対的な受動性ともいえるべき在り方がいかにしてもたらされるのか、さらにこの自我的主体に拘束された遠近法から解放されたとき、時間や身体は一体どのようなものとして現れるのか、すべての存在者が等距離にあるときいかなる倫理が生み出されるのか、を明らかにしている。その論証には十分に説得力があり、その手続きも綿密である。さらにこの主題を改めて「関係」を主語に論じ直していく語りは、臨床教育学の手法として従来の研究にはない新しさを示している。このようなヴェイユのテキストの綿密な読解を通して、「創造的注意」に焦点をあててアプローチすることで、「我有化」といった近代的な主体理解を批判的に吟味し、「関係」へと自己を明け渡すという自己の在り方に、新たな「関係」の誕生を見ることができるのである。

「創造的注意」という用語をキーワードとすることで、従来ヴェイユ研究で問題とされてきた社会革命的な前期思想と神秘主義的な後期思想との断絶を、一貫して理解する視角を明らかにした点もヴェイユ研究として優れていると評価できる。さらに、著者はここから「関係」の働きとして教育的関係を捉える臨床教育学の方法としての可能性を論じており、序説的な論述にとどまるとはいえ、臨床教育学の新たな方法と倫理の在り方を示した優れた研究として高く評価することができる。こ

(続紙 4)

のように本研究は、ヴェイユについての先行研究の成果を踏まえた上で、「創造的注意」を主題として論じることで、一方でヴェイユ研究として独自の観点から解釈を深めるとともに、その解釈を梃子にして臨床教育的関係の論じ方と倫理の在り方を提示するという二重の課題を実現し、非常に高いレベルの研究となった。

もちろん本論文に問題点がないわけではない。例えば、従来の「教育的関係」論に対する理解は紋切り型の理解に終わっており、批判の対象が限定的なためにヴェイユの思想との議論が十分に咬み合っていないこと、あるいは「～ではない。また～でもない。」という本論文にたびたび登場する否定形をくりかえす文体は、既存の解釈を否定しながらヴェイユのテキストを読み解いていく緊張感を孕む文体であり、読み手をこれまで見つけることのできなかつた細い道に誘導していくものではあるが、ともすれば他の解釈との対話を閉ざしていく傾向があることなどである。しかし、このような問題点は本論文の価値を少しも損なうものではない。

試問での受け答えは極めて明解であり、本論文の内容がよく考え抜かれた結果であることを改めて示した。

よって本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成22年2月17日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降